



# 秋うらら

---

---

猫ト みかん

---

月よみの光をまちてかへりませ 山路は栗のいがの多きに 良寛

はっと小夏が目を覚ますと、辺りはとっぴりと日が暮れていた。

「ああ、しまった。寝てしまっていたか」

油断すればあっという間にくっつきそうになるまぶたを、何度も瞬きをして粘着力を下げる。口の端を指でぬぐった。枕になっていた本を持ち上げて、よだれのあとがないことを確認する。問題なさそうだ。

ほっとして小夏は開いたままだった本を閉じた。

「美冬一、この本を借りていっても良い？」

立ち上がりながら呼ばわると、

「あれ、起きたの？」

細い声が出て、縁側に面していた障子が開く。冷えた空気が音もなく差した。

「夜は冷えるね」

小夏は冷たい空気を鼻から胸に吸いこんで、ぶるりと震えた。鳥肌をなだめるように、腕を擦る。

「お茶を淹れてあげる」

縁側に腰かけていた美冬は立ち上がって静かに笑んだ。男のくせに美人にほほ笑みやがって！と毎度小夏に罵られる笑みである。

「いいよ。わたし、もう帰るから。ねえ、この本借りていっても良いでしょう？」

小夏は持っていた本を目の高さに掲げた。

「本は構わないけど。帰るって、今から？」

美冬が首を傾げると、長めの前髪がさらりと揺れた。

「帰るよ。大通りまで出れば明るいし」

「こんなに暗いのに、女の子一人で危ないよ」

「美冬が明るいところまで送ってくれば問題ない」

「それは面倒だなあ」

正直に言った美冬に、小夏は唇を突き出した。

「タコの真似？」

にこりと美冬が笑う。

「フグの真似」

ぷくっと小夏は頬をふくらませた。

「一句思いつきました」

はい、と美冬が手を上げる。

「どうぞ」

小夏は手を差し出した。

「タコの裏に うち望むれば 赤頬の」

「フグの高値に 秋風の吹く ってか」

下の句を継いだ小夏はむっと顔をしかめた。あはは、と美冬が笑う。

「まあ、冗談はさておき」

「お前が言い出したんだろう」

「帰るのはもう少し待ちなよ。月が出てくれば、足元を照らすくらいには明るくなるだろう。何しろ、この山奥じゃあ、街灯もないからね。うっかり栗のいがでも踏んで、足を怪我しては大変だよ」

「月が出たって足元は暗いだろう」

腰に手を当てる小夏に、美冬は人差し指を振った。催眠術にかけようとするには、少し早い振り方だ。

「名月と謳われる秋の月の威力を見損なってもらっちゃあ困るよ」

「なぜお前が威張る」

半眼で美冬を睨んでから、小夏は改めて彼の向こうの夜を見やった。

暗い。

何かの鳥が鳴き声を上げながら飛んで、木々の黒い葉を揺らしていった。

「本も読みかけだったんでしょ？」

「まあ」

「あったかいお茶も淹れるよう？」

甘い声で美冬が誘う。

小夏は唇を突き出しかけて、ひっこめた。わざとらしく溜息をつく。

「仕方がない。木の根につまづいてもつまらないしな」

「そうそう。君子危うきに近寄らず」

後ろ手に美冬が障子を閉める。冷たい空気が、たん、と閉じた。

「それ、使い方おかしくないか？」

苦笑しつつ、小夏はさっきまで座っていた座布団の上に戻る。

「また一句思いつきました」

「はいどうぞ、美冬サン」

投げやりに小夏が手を上げた。

ふふ、と美冬は含んで笑う。

「寂し夜の風吹く声も今は届かず 我が家に月を隠したるゆえ」

小夏は難しい顔をした。

「つまり、どういう意味だ？」

「おや。意味を問うのは無粋ですよ」

笑って美冬は台所のほうへ行ってしまふ。お湯を沸かすためだ。

腕組みをする小夏を、一度振り返る。

「今夜が新月だとバレたら、きっと小夏は怒るよねえ」

怒る彼女は容易く想像がついて、美冬はこっそり笑った。

ガスコンロの火をつける。

夜風に冷えた体は、じわりと内から温まってきていた。